

随想

# 夢が叶う<sup>かな</sup>ことを信じて

社団法人日本音楽著作権協会理事長

加戸守行

新国立劇場は、長年の苦難の道程を経て完成に至った。その間の折り目節目での対応が結果として副産物を生んだ。これからも幾多の困難があるうが、近い将来に運営面での夢も実現することを信じている。

待ちに待って、待たされに待たされた夢の新国立劇場がようやく完成し、この秋にこけら落とし公演を迎える。誠に慶賀に耐えない。

それにしても、国会附帯決議から三年、劇場用地選定から二〇年、着工から五年、歴史を刻んだ長い長い道程の間に、

第二国立劇場と言われていた時代から熱心に陳情要望活動が続けられた現代舞台芸術関係者もさることながら、その蔭<sup>かげ</sup>で数え切れないほどの下積み<sup>かき</sup>の職員<sup>か</sup>の情熱と努力が幾多の困難と障害を乗り越える原動力となったことを、事務に携わった筆者から、喜びをもって開場を迎える国

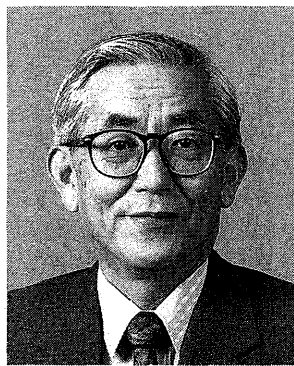
民の皆様<sup>みな</sup>に御理解願いたいと思う。また、これまでに現代舞台芸術関係者からの様々な要望が充足されないまま鬱<sup>う</sup>積していた不満のしからしむるところ、これからの新国立劇場の事業に寄せる期待には極めて大なるものがあると思われるが、過去の道程との対比において、かつ、現下の置かれた国家財政状況等の客観的条件を踏まえ、一気に頂上を目指す気持<sup>き</sup>ちを若干抑え<sup>おさ</sup>ぎみに理想の道に進むことを望みたい。

筆者は、いわゆる「二国騒動」から設計コンペ入賞発表まで、劇場用地代替土地確保から法案成立まで、着工から劇場

付属舞台芸術センター実施設計までと、三回にわたり通算七年半、苦難の歴史の四分の一の期間を担当させていただいたことに、手前味噌ながら、いささかの誇りを覚えている。

担当した時期や分野は断片的とのそしりは免れないが、その中であつても、この世界における象徴的な事件、対応の結果としての副産物など、強く記憶に残っている事柄のいくつかに触れておきたい。そのことが、将来における新国立劇場の運営面を考える場合の一つのヒントたりうるからでもある。

文化庁次長時代にあつた「二国騒動」は、それまでの先人の積み重ねに基づき東京工業試験所跡地に建設する劇場の延べ面積を大蔵省との間で確定し、専門委員会での検討と平行して着々と準備を進めていた段階に突然起きた。昭和五九年初夏、日本を代表する作曲家など著名人四人の連名による要望書は、劇場用地は交通の便が悪く環境も良くないので他の用地に変更すること、大劇場の観客数一六〇〇席はあまりにも少なすぎるので二



かと・もりゆき 愛媛県出身。昭和32年文部省入省。文化庁次長、体育局長、教育助成局長、大臣官房長を歴任。公立学校共済組合理事長、日本芸術文化振興会理事長を経て平成8年11月から現職。著書『著作権法逐条講義』。

〇〇〇席以上とすることなどを趣旨とするものであつた。

マスコミや一部関係者がこれに乗り、しばらくして日本建築家協会の新会長に就任したE氏がオペラ通であつたことも手伝つて精力的に取り組み始め、加えて国際設計競技の採用を求めると、文化庁サイドの必死の対応にもかかわらず、事態の紛糾は一年以上にわたつて続いた。これより先、国有財産審議会の小委員会委員長として初台用地を劇場用地に提供させるのに大きな役割を果たされ、当時工学院大学理事長の職にあつた高山英華先生に相談にあがつた際、先生から、特定街区方式により自己敷地の余剰空中権を譲渡する対価で自己資金なしで工科大学の全面改築を計画しているが、第二国立劇場もその方式でやってみたらどうかとの提案があり、目からうろこの落ちる思いをしたことを思い出す。

この時点では、大蔵省との折衝において、建設費は文部省予算シーリングの枠内で全省的に措置する方向で進んでいた。私としては、余剰空中権対価をもつて大幅赤字が予想される劇場運営費の

原資に充てれば将来の財政負担をある程度解消できるのではないかと考え、多くの解決しなければならぬ問題のあることを承知の上で、その方向での対応をすべく高山英華先生の一番弟子である大村虔一先生(当時都市計画研究所長、現東北大学教授)に調査委託をすることとした。

その後、諸般の事情の変動により、建設費そのものを余剰空中権対価によってまかなう方針に転換されたが、このアイデアなかりせば今日の新国立劇場が存在しえたかどうか、ある意味での「井戸を掘った恩人」として高山英華先生の名を特記しておきたい。

ところで、騒動の解決策としての結論は、①劇場用地については山手通りから劇場への通り抜け通路を設けることとして用地買収予算を計上すること、②劇場の座席数は一八〇〇席に増加すること、③設計募集は国際的設計コンペとするこ

とであった。

①の通り抜け通路は、その後特定街区方式によるオペラシテイビル構想の浮上

め、の法案を提出することとなったが、ち

地は、甲州街道側に存在して立ち退きを拒んでいた八軒の雑居建物の敷地の交換用地として役立ったほか、銚子での舞台芸術センター用地との交換原資ともなった。②の座席数は妥協の産物であったが、劇場の興行面での採算性を強く考えさせるよすがとなった。③の設計コンペもそれなりに成果を挙げ、柳澤孝彦氏の理想的な作品が採択されたことは御承知のとおりである。

「二国騒動」は、物理的に劇場建設時期を大幅に遅らせることにはなったが、このようにいくつかの副産物を生んだ。その最たるものは、今考えれば高額でバブルのピーク時に余剰空中権の譲渡が行われた結果として劇場建設費をまかなうことが可能となったということであり、新国立劇場サイドとしては大変幸運であった。特定街区構想に協力され空中権を買い取っていただいたオペラシテイビル側への感謝をいつまでも忘れてはなるまい。意図しないことであつたとしても、私たちにとつては本当にありがたいことであつた。

副産物の成果は、物事の是非が一義的ではないということの証左でもある。

文部省大臣官房長時代は、劇場用地を出資してもらうための代替の文部省所管土地の提供が必要であつた。文部省全体としての視点から候補を選定し始めたが、何しろ当時三〇〇億円近い時価評価を受けていただけに、当時の大臣官房会計課長の吉田茂氏を督励しての作業は容易なことではなかつた。文部省職員宿舍の廃止、強い反対を押し切つての他の教育機関のスペースの割愛、大学研究所の未利用地の吐き出し等々の数字合わせで急場を凌ぐこととしたが、そのために芸術に無関係の施設や職員に犠牲を強いる結果となり、胸の痛む思いであつた。苦勞された吉田氏が文化庁長官として新国立劇場の完成を迎えられるとは、不思議な巡り合わせではある。

昭和から平成に御代が変わり、特定街区の申請時期も迫り、現代舞台芸術劇場の所管を特殊法人国立劇場(平成二年日本芸術文化振興会に名称変更)とするた

運に巡り合えた。特に、バブル崩壊後の

余儀なくされるであろうことは、言を待

によって変更され、そのための既購入用であった。

本芸術文化振興会を名称変更とするた

めの法案を提出することとなったが、ちようど国会は消費税問題で大荒れに荒れていた時期にあたり、成立の見通しがつかない状況にあった。

しかし、何としてでも年度内に成立させてほしいとの気持ちから懸命に国会の先生方に早期成立をお願いしてまわった。日切れ法案の扱いにぜひしていただきたい

いと、文字通り足を棒にして赤じゅうたんのの上を走りまわったものである。とても無理だろうとは思いつつ、自民党国会

対策委員会から野党国会対策委員会に申し入れていただき、なんとか与野党の理解を得て、滑り込みセーフで国立劇場法

改正の年度内成立をみる事ができた。その関係で文部省の他の法案に結果として若干の迷惑をかける結果となったこ

とは辛いことであり、新国立劇場関係者にも知っておいてもらいたいことでもある。栄光の蔭に犠牲ありという一例とも言えようか。

図らずも平成四年七月、筆者は日本芸術文化振興会理事長に就任し、翌月工事

契約を締結して起工式を迎えるという幸

運に巡り合えた。特に、バブル崩壊後の景気回復策としての公共事業向けの大型補正予算のおかげで、舞台芸術センターの建設費、京王新線初台駅の出口の増設経費分担金などの環境整備に要する不測の経費を捻出することができたのは望外のことであった。

こけら落とし公演の見通しがついた平成七年末、国分正明理事長に後を託して職を去ったが、満足感でいっぱいである。それもこれも、文部省の温かい御指導、

御配慮、筆者を支えていただきすばらしいこの仕事に一身を捧げた職員の皆さん、そして御支援、御協力をいただいた関係者の皆様のおかげと、この紙面をお借りして厚く御礼申し上げたい。

ハードが完成した後の課題は、当然のことながらソフト面に重点が移る。新国立劇場の責務としての舞台公演を中心とした現代舞台芸術の新興、劇場運営、人材育成、情報の収集・提供、いづれをと

っても、多額の経費を要することばかりである。その意味で、財政面では苦しい運営を

余儀なくされるであろうことは、言を待たない。膨大な赤字国債を抱えて財政再建に取り組んでいる政府に国立だからといって公演経費に大幅な国庫負担を要求しても簡単に認められる状況にはないであろうし、民間からの賛助を求めて新国立劇場運営財団が必死の努力を積み重ねるとしても、現在の不況下においては期待通りの成果が得られるであろうか。

「文化の振興は国の繁栄に依存する」とも言われている。年によっては、自主公演の本数や規模を過渡的に縮減せざるをえない事態も想定される。吹雪の時には頂上を目指すのを見送るのが登山家の知恵であり、吹雪はいつまでもは続かない。たゆまず国民的理解を求めつつ、関係者の熱意により取り巻く厚い氷の壁を溶かしていく以外に特效薬はない。

過去の歴史の示すところ、これまでの準備段階で新国立劇場は幾多の困難を乗り越えてきた。今後も幾多の困難が待ち

つと乗り越えるに違いない。筆者は信じている。いつかは夢が叶うことを。

図らずも平成四年七月、筆者は日本芸術文化振興会理事長に就任し、翌月工事

契約を締結して起工式を迎えるという幸

運に巡り合えた。特に、バブル崩壊後の景気回復策としての公共事業向けの大型補正予算のおかげで、舞台芸術センターの建設費、京王新線初台駅の出口の増設経費分担金などの環境整備に要する不測の経費を捻出することができたのは望外のことであった。